285-1969・3

定価一部50円
第285号 昭和44年3月10日発行（毎月10日発行）

昭和44年（1969年）
3月号（No. 285）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

会員通信
ダージリン近況……1
アルゼンチン便り……2
スコット基地から……2
北海道の山を滑る……8
北海道支部設立の相談……8
報告
見通し明るいエベレスト許可……1
サラグラール中央峰……3
マルビッティンの遭難……3
ドイツ山岳会とハウザー……4
UIAA旅日記……4
ソ連岳界 1968……9
訃報
近藤茂吉氏逝去……8
稲豊さん逝く……11
図書室便り
新刊図書受入報告……10
図書委員会報告……10
会務報告
二月理事評議員会……10
会員異動……10
新入会員……11
ルーム日誌……11
その他
この一本展に寄せて……2
ケルバン博士講演会……5
会員章余談……5
古書と旅の一生……6
会費値上げ案……7

ダージリン近況

田中　薫

第二十一回国際地理学会議（ニューデリー）の帰途、ひとりダージリンに立寄り、去る昭和四十三年十二月十八日から二泊三日滞在した。終日雲を見ない快晴でヒマラヤの展望を満喫。のんびり休養の予定だったが見るものが多く時間ぎれをなげく結果となった。

まずテンジン氏の名において軍部が創設したヒマラヤ山岳研究所の展示場であるが、地元インドをはじめ、各国の有名なヒマラヤ登山隊の記録や、装備を網羅していて、登山史料館として豪華を極めている。テンジン氏に対する各国登山隊の協力の深さが見られる。いま休憩所の建物が建築中で、これが完成すると、ゆうに半日を過すに足る快適な一廓となるであろう。

チベットからの亡命者を収容する施設が日・米を含む各国の援助でまず完備しており、作業場では注文による手織りじゅうたんの製作が行われている。染・織ともに本格的な伝統工芸として行われているが、原毛はチベット産が入手できないためインド産で代用している。チベットから亡命したラマ僧の個宅を訪ねて見たが、はからずもそこで、ラサテリアの仔犬を見た。ラサテリアはラマ寺を守る忠実な犬で、私の妻が長年愛撫した犬種であるが、数年前老死したときは妻は二、三日泣きつづけたほどの心の通う犬だった。代りがほしくて内外の犬屋であさったが遂に手に入らずにいたのをここで発見し、抱いて帰りたい衝動にかられた。

さる十月三日から六日にかけて六十二時間の連続降雨がこの地方を見舞い、当地周辺にインド独立後最大の土壊侵蝕、地辷りなどによる災害（五五〇〇人の死者が出た）を起した。その跡が見たくて来たのであるが、惨状は予想以上であった。シリグリ、ダージリン間の登山鉄道はむろん不通で、山麓のバグドグラ飛行場からダージリンに通ずる自動車道路も山にかかると地辷りで寸断され、二ヵ所ほど大修理のため、定時交通遮断を行っており、シェパの娘がヒマラヤを背景に立ち働く姿が見ものであった。ダージリンからカリンポン（シキム）に通ずるティスタ川の鉄吊橋が堅固なコンクリートの橋桁を洗われて落ちている。橋畔のティスタ部落はほとんど壊滅し、ここだけで五八二人の死者を出しているという。住民は仮小舎に住み、惨状はなまなましい。

このような惨害にもかかわらず、心を打たれるのは人口四万の高所都市ダージリンの都心部が無傷なことである。これは日本杉（クリプトメリア・ジャポニカ）の森林に守られた自然保護の功績に帰することができる。ここの見事な杉の樹齢は日本での常識では百年以上と見られるが、当地の異常な生長率を考慮に入れると、六、七〇年ではあるまいか。はたして何年にどういう経過で日本杉がここに導入されたか日本の専門分野でも知られていないのは不思議である。ダージリンは一八九七年の地震と、一八九九年の暴風雨で地辷りの災害を受けた歴史があるが、日本杉の植林がこの災害に結びつくものかどうか。どなたからかご教示をうけたい。

ダージリンから前述のティスタ川の橋まで二二哩の林道に沿って、見事な日本杉の植林が行われていることも私の眼をおどろかせた。幹に植林年号が明記してあるのを私が走る車上から認めただけで、一九一八、一九二四、一九二九、一九三二、一九三三と続いており、英領時代に大規模な計画的植林が行われたことがわかる。ある茶園には三五年くらいの桜並木があり、花時は見事であるというのにも驚かされた。原生林の皆伐、山地民の苛酷な急斜面耕作に備えて進められてきた植林が一九四七年のインド独立前後から中絶したであろうことは想像しやすい。独立後、最初の降雨（微かな地震をともなったという）による災害は一九五〇年に起っている。現在インド政府は日本の杉の植林は一七〇〇―二七〇〇メートルの高度にひろく適用されると発表し、近年、各種の植林を再開したが、こんどの大災害には間に合わなかったと見られる。

私の泊ったオベロイ・マウント・エベレスト・ホテルには四十年間勤続の老職員モハメッド・アリ氏（六〇才以上）がおり日本杉は子供のころからあったと証言してくれた。また同氏によれば近年当地は暖くなり過去十一年間連続して積雪を見ないという。それでも気温が夜は零下五度に下り、シーズンオフのホテルで昔なつかしい湯タンポで眠るのが楽しい。（昭和四十三年十二月十九日ダージリンにて）

見通し明るいエベレストの許可

さる二月十日、本会エベレスト登山についてネパール政府との交渉に出かけた松方三郎氏は、二月二十五日夜帰国した。

本会では三月一日、本会ルームで松方氏を囲み、三田会長、槇前エベレスト委員会委員長、常務理事、前エベレスト常任委員ら十五人が集まり、そのくわしい報告を聞いた。松方氏から大要次のような報告があり許可の見通しは明るいことがあきらかにされた。

「ネパール政府は、本会の計画について過去の実績も承知しており、登山料の半額を支払ったことも認めている登山新規則書が出来たらそれに従ってあらためて申請することになるが、許可は外務省を通じて行なうことなる。それがいつになるか、相手がネパールなのでまだ不明だが、新規則の発表も間近いといわれており、諸般の事情から判断して見通しは明るいと思う。」

具体的な方法は三月六日の理事会にはかって進めることにした。（大塚）

お知らせ

◇第二五〇回小集会　三月十九日午後六時会から会員雁部貞夫氏の「ヒンズークシュの山の話」を行ないます。

◇学生部総会　四月八日午後五時半から青山学院で行ないます。加盟校は必ず代表者が御出席下さい。

◇昭和四十四年度通常総会　四月十九日午後二時から本会ルームで開催します。四十三年度事業報告、会計報告などを行ないます。

＝アルゼンチン便り＝
―セロ・ネグロ（6152 m）―

防衛大隊　川　上　隆

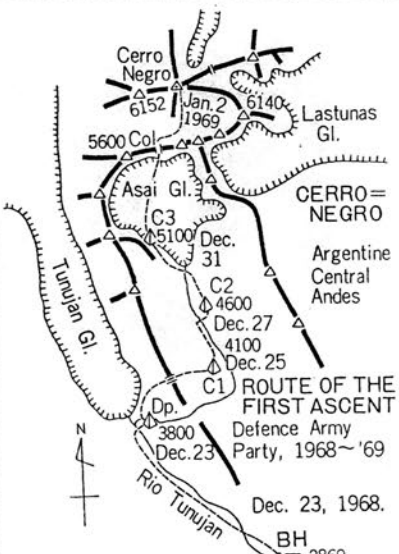
明けましてお目出度うございます。私達はCerro Negroにて元気に新春を迎えました。

さて、私達の第一回登山目標でありますセロ・ネグロにつきましては、リオ・トヌジャン（Rio Tununjan）上流の左岸にあります Ref Militar（陸軍小舎＝B.H）入りより15日目、一月二日に12時10分、主峰の初登頂に成功いたしました。

登頂者は日本側2名、アルゼンチン陸軍第八旅団所属第11歩兵山岳連隊勤務、Lucero 伍長の計3名。ルセロ君は27才、身長1.77 m, 体重84 Kg、なかなか精悍で、優秀な山岳兵です。

彼はこの登山で、五〇〇〇m以上の主だった山を5回登ったことになり、陸軍よりコンドル・バッジを授与されるそうです。

次に Tupungato 村にある第11歩兵山岳連隊から、セロ・ネグロに至る行程、標高と直線キロ数について記します。



Tupungato（1000 m）-65 km（Truck）-Yaretae（3500 m, ムーラの集結所）-23km（Mutas）-Port Argentino（4380 m）及び Ref Militar（B.H, 2860 m）-19 km（Mulas）-C 1（4100m）-2 km（徒歩）-C 2（4200 m）-3.25 km（徒歩）-C 3（5100 m）-4.20 km（徒歩）-Cerro Negro（6152 m）

全般的にネグロは五五〇〇m前後が悪く、ルートとしては、私達の南面からのルート即ちトヌジャン河左岸からネグロ南面に入りこんでいる谷が一番良かったようです。

氷河の規模は小さく、南面の場合、長さ二・八㎞、幅二・三㎞（推定）、ベニテンテスは50㎝から1mの手頃の大きさで、発攀上の問題はありませんでした。季節的にこれから大きくなるようです。

一月三日、C3撤収、全員C1に集結、六日、ムーラにてBHに下りました。

12月31日から連日の好天で、トヌジャン氷河をはじめ、各枝氷河が融けはじめたため、トヌジャン河は異常に増水、下山時のムーラによる渡渉は、何回かピンチにさらされました。

この渡渉や悪路の苟上げ、荷下げのため、ムーラが6頭もたおれたそうです。

私達のセロ・ネグロの登頂の成功は、輸送支援にあたったアルゼンチン陸軍第11歩兵山岳連隊の献身的行為のお陰です。

一月八日、Marmolejo 東峰（5920 m）目指して出発。10日、三五〇〇m地点のC1から、いっきに東峰の全員初登頂をと意気込んで出発したのですが、東峰とチリとの国境稜線の間に入っている北面氷河が、クレバス、ベニテンテスともに想像より悪く、失敗しました。偵察不充分と甘くみた結果です。

13日、ツブンガト村に全員下山、第11歩兵山岳連隊にて次の登山に必要なムーラの調達、休養等を含め、一週間を過します。

今後の予定は、セロ・ツブンガト（6800 m）の北東約40㎞にある、プラタ（Plata）山塊の北々東、ツブンガト河の下流の右岸からプラタ側に入りこんでいるフェア（Fea）谷源流の山々（Enanas 山塊）に20日間の日程で登ります。この辺は、アルゼンチン中部アンデスで数少ない未踏査地域です。五七〇〇m前後の未登峰が数座あります。しかしマルモレホ北側以上に氷河の状態が悪いそうですので、一応苦しい登攀になりそうです。それにツブンガト河の渡渉が問題です。

朝井一男隊長は12月24日、ツブンガトの陸軍小舎をたち、1月4日ブエノス・アイレス発、ニュー・ヨーク、パリ経由で1月18日頃日本着の予定ですが、登山隊の帰国は3月中旬になる予定です。会員の皆様によろしくお伝えください。

（吉沢宛）

スコット基地から

向　一　陽

また南極へ来ることができました。十一月十九日羽田発、二十日ほどニュージーランドでブラブラしたあと十二月十日、クライストチャーチから米軍機で南極入りしました。極点へはマクマードから二度往復し、計五日滞在し村山隊を迎え、見送りました。いまニュージーランド・スコット基地（マクマードから五キロ）に居そうろうしています。

人手が足りないのでこれ幸いと屋根のペンキ塗りや、土木仕事に使われています。面白いのは、フィールド・アシスタントとか報道とか適当な名目をつけて（僕も似たようなものですが）要するになんでも南極へ来たい連中があちこちにもぐり込んでいることです。スコット基地にイタリアのジャーナリストというのがいました。いろいろ話しているとなんのことはない、カラコラムやアンデスで活躍したカルロ・モウリ、報道とはイタリア山岳会のための報道だとわかりました。アメリカの若い空軍の少尉で山好きなのがいて、昨日一緒にザイルを組んでマクマードの裏の一ピークを試みました。

「昨日」といっても彼の勤務が終わったあと午後七時から十二時まで、高さは四百五十メートルあまりですが、海氷の上から四十五度ほどの一直線の氷壁、ヒドンクレバスだらけ。頂上直下で時間切れのため引き返しました。先年このマクマードの裏山には僕のケルンを二つ積んでいるので、こんども二つは積みたいと思っています。

なおクライストチャーチで偶然ノーマン・ハーディ氏に会い、ニュージーランド山岳会に入れてもらいました。「ミスタ・マツカタによろしく」と何度もいっていました。帰りにまた寄ることになっています。

（一月二日スコット基地で、松方宛）

この一本展によせて

恒例のこの一本展は盛会裡に終了したが、都合で出品できなかったものの中に、大変珍しい本があるので紹介はしたい。

The History of Kamtschatka and the Kurilski Islands, with the Countries Adjacents; Illustrated with maps and cuts. By James Grieve, M.D. (Trans. from Russian) London, 1764.

カムチャッカ・
千島列島の歴史
（付近隣の地誌）

近世の世界地理発見史上とり残されていた地域は北太平洋方面、特に北海道（蝦夷）、千島列島からカムチャッカ、ベーリング海沿岸一帯であった。十七～十九世紀にヨーロッパ各国は日本の北東に金銀の未知の宝島があると想像を逞うし探検隊も出没したが、本国から遠いのと濃霧、時化、寒冷等のため測図が大変遅れていた。ロシアは国家的に探検隊を出し当時の大学者クラシニコフが地誌、自然科学を主に報告をまとめた。これをイギリスの医師が訳出したものが本書である。本書中には千島アイヌ（クリール人）についての記述があり、わがエゾアイヌと関連もあり興味ある一章である。竪穴に住んでいた千島アイヌはエゾ地を介して当時の日本の文化、漆器、飯器、武器を交易で入手し日本の影響が深かったことを物語られている。若し本書を訳すれば、考古、土俗、動植物誌など歴史、探検上大いに寄与されるものと想われる。（43・11・25）

（木村義男）

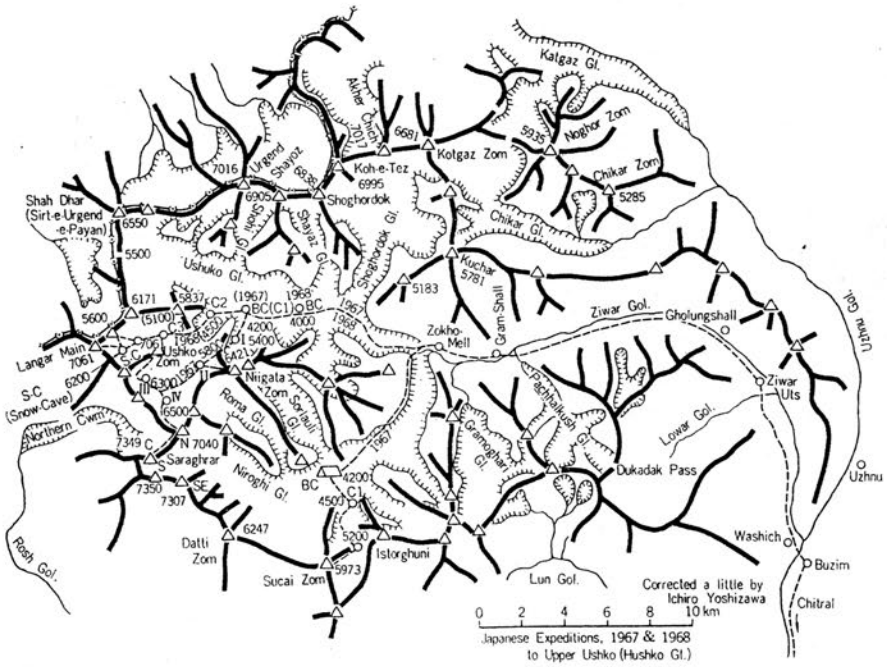
韓国山岳会員遭難　二月十八日のソウル放送によると二月十四日、韓国山岳会員十人が江原道の雪岳山（一七〇八メートル）で設営中雪崩で全員死亡した。死亡したのは隊長李熙昇陸軍中佐（四十二）副隊長金東基（三十九）ソウル工大副教授ら十人で、十四日午後二時ごろであった。

サラグラール中央峰とランガール主峰の記録
——ともに第二登——

一九六七年の新潟大と、一九六八年の早稲田岳友会の同じ方面の記録が、やっと送られて来たので御紹介する。前者は外国の山岳会からも屢々催促されていたものであるが、これでどうやらその方面にも知らせることが出来るようになってホッとした。

記録をつくるために山へ登るのではないが、登った以上は出来るだけ早く正確な報告を出した方が、いろいろな意味で親切だと思う。

◇



新潟大学隊（一九六七年）
横山史郎（24）、梅洲晃一郎（24）

活動状況
6/25～26＝Chitral, 6/27＝Chitral—Barenis—Reshun—Shagram, 7/01＝Washich, 7/02＝Ziwar Gol, 7/03＝Gramshar, 7/04＝Niroghi Gl., BC（4200 m), 7/05＝C 1（4500 m), 7/06＝Recce（偵察), 7/07＝Bivouac（5200 m), 7/08＝Sucai Zom（5973 m), 7/12～15＝Ushko Gl., BC（4200 m), 7/16～17＝Recce, 7/18＝C 1（5400 m), 7/20＝Peak 6421 m（Niigata Zom) was Climbed by the 2 for the 1st time.
7/22＝C 3（6300 m), 7/25＝Peak 7061 m was Climbed by the 2. Named Hushko Zom（former Langar Hind). Other sources show it as 6950 m.
7/26＝C 4（6500 m), 7/27＝Saraghrar Central（7349 m) was Climbed. 2nd Ascent. 7/28＝C 4-BC, 8/07＝Chitral.

◇　◇

早稲田岳友会（一九六八年）
立花種則（31）、鈴木理己（24）、野口勝志（25）

活動状況
7/21＝Chitral-Shagram, 7/27＝BC（4000 m, Ushko Gl.), 8/02＝C 1（4300 m), 8/05＝C 2（4500 m), 8/10＝C 3（5100 m), 8/11＝Nameless peak（5600 m), 8/12～14＝Stay, 8/16＝AC（Snow-cave, 6200 m), 8/18＝Langar Main（7061 m), 8/25＝BC, 9/01＝Chitral.

◇マルビッティンの遭難他◇
——一九六八年——

Malubiting（7453 m）と言えば一橋大学佐藤之敏君が一昨年パキスタンの首都に二ヵ月も滞在して登山許可の取付けに頑張っていた山であるが、それが去年英国隊に攻撃されたということを聞いてややあっ気にとられていた私は、その後のニュースで隊員の一人がそこで死んだということがわかって、矢張り手ごわいのかなと思ったことであった。

ところでロンドンのUIAAの会議でいろいろ世話になった親切な青年登山家W・R・ニート君から最近送って来た、「火喘登山会」（TCC）の会報（"Arete", Autumn, 1968）の中に右遭難事件のことが一寸出ていたのでお知らせしておくことにする。

◇　◇

隊長 John Allen と遭難者 Brian Ripley（25）を含むマンチェスター登山隊が、マ峰の西峰を目的にしてラワルピンディをあとにしたのは七月のことであった。

事件は隊長と二人で7月29日にC 4の場所を偵察に行った時に起ったもので、リプリーは崩れた岩塊を避けようとして約一七〇m滑落し生命をおとしてしまったのである。

二人は山稜を下りていて、落石の危険が多いのでロープを外した。とそのとたんにリプリーは落ちた。彼の遺体はあとでガリーの中に発見されたが、新らたな落石の危険のためにそれを収容することが出来ず、彼の名をマ峰のかげの花崗岩に刻んで、遠行隊は引上げることになったという。

◇　◇

高山病療法

アンデスで仕事をしているドイツの科学者が、高山病からの悪影響に抗するものとして、新らしく生れた子牛の血清注射がいいということを発見したという。事実一五〇人の兵隊さんにこの注射をしたところが、その結果が非常によく、動きも活発になり、身体的な不快感は何も出て来なかった。

その理由は、酸素の欠乏している環境（母親の子宮）から出て来たばかりの子牛の血清は、身体の細胞への酸素と血糖（blood sugar）の移送を容易にするからだという。

◇　◇

Fritz H. Wiessner と言えば、ヒマラヤの研究者なら誰で知っていると思うが、彼ももう69歳になった。これは三田副会長と同じ年であり、私よりも三つ年上ということになる。

その彼から最近手紙やいろいろの資料が沢山送られて来た。（彼とはAACの招待でNYで昼食を御馳走になった）その手紙の結びに、I hope that our paths cross again という一くだりがあったが、これは面白いいい方だと思う。皆さんも何かの折にお使いになったら如何です。　（Y）

ドイツ山岳会とギュンター・ハウザー

吉沢一郎

一緒にハウザーの案内で内部を全部見学して歩く。凡ゆるものが完備している点、日本山岳会とは比べものにならないが、これは会員数や組織などの点から、比べる方が無理であろう。図書室から、酸素吸入器、テント、ザイルその他の小物にいたるまで全く管理が行き届いている。遠征隊の一つや二つはいつでも出せるようになっているのである。

ところでここいらでわれわれに親しいG・ハウザーのことについてちょっと触れておこう。

彼は私の判取帳に書いてくれたとおり一〇年来の文通上の友人であった。彼がコルディエラ・ブランカのアルパヨ南峰（五九八〇m）（最高峰）に初登頂したのが一九五七年であるから、それ以来の知己である訳だ。海外連絡委員の鈴木敦之君も近頃度々彼のところに寄っているので、彼から来る手紙には必らず、Mr. スズキに宜しく、と書いてある。

彼はその後、一九六五年にドイツ隊を率いてヒマラヤのガンガプルナ（七四二六m）へ行ったが、その時登って素晴しい写真を齎らしたテント・ピーク（五五五〇m）を最初は初登頂と思っていたらしい。しかしAJに出ていた記事によってそれが第二登（第一登は六四年の京大隊）とわかり周章てて私のところへ詳細を知らせて欲しいと言って来た。

そこで私は当時の隊長であった樋口明生氏のところへ連絡して詳しい資料を頂き、それをハウザーのところへ送ってやった。彼の名前で出ているその時の登山記（"Eisgipfel und Goldpagoden-Expedition ins Königreich Nepal", Bruckmann, München, 1966）では「その誤まりから、危くのがれることが出来たが」その72頁の注に「どうして日本隊がこのことをもっと早く一般に公表してくれなかったのかがわからない」と書いている。

彼は私にもこの本をくれたが、それには次のように書いてある。

〝私は喜んでこの登山記を吉沢氏に贈る。われわれはいつも、ネパールで数多くの立派な登山をやっている日本の偉大な登山家達に敬意をはらっています。〟 München, 27. 9. 1968

この時彼はフィリップ・ローゼンタールなどとペルーのビルカノータ山群（彼の嘗遊の地）へ行って、サリオイラ（五三三九m）とコンドルトウワコ（五五八六m）に初登頂して戻ってきたばかりのところであったのだ。

はじめはシュタイアまで一緒に行く筈であったG・グルーバーが現われたが、そこへはハウザーが連れて行くというのでグルーバーは、一人で先へ出た。私は紹介された駅前のルイトポルト・ホテルへ行く。

翌日はチアンタールの山々を欧州人として初めて登った（一九六七年）、アルフレッド・リンスバウワーとミュンヒェンの市内を歩く。本屋、運動具屋、食堂、寺院、地下鉄工事などを見て歩く。彼からその後手紙が来て、ヒンズー・ラージに関する情報を継続的に交換したいという依頼があった。

夕方5時、いよいよハウザーの車に乗ってオーベル・エステルライヒにあるシュタイヤ（Steyr）に向う。オーストリア山岳会の総会に出席するためである。これもハウザーの配慮によるものなのだ。

ゴタゴタしたミュニックの町を離れるとあとはヒットラー以来のあのアウトバーンを突走ることになる。実にいい気持ちである。

国境の検問所はバスも見られずに通過。やがて右手に懐しいサアツブルグを囲む山々が見えて来た。

ウィーンの少し手前のリンツから南へ折れるとシュタイア。こんな片田舎の町へ来たのは日本人としては私が初めてなのではないかと思っていたら、なかなかそうではないらしい。これもあとで御本人から聞いたのだが、一橋大学の以前の教授、常盤敏太先生も来たことがあるし、翌日には昼食会の席へ、日本の商社の人が日本人がいると聞いて訪ねてきてくれた。

ホテル・マイルベーターに泊めさせてくれた。郊外の二級ホテルだが家族的であり、あたりも静かでよかった。

28日（土）はハウザーが打合せで忙しいので私一人で町をうろついた。市場でバナナの立食いをしたり、本屋でハラーのヒマラヤ写真集を見つけたり、写真をとったりで結構時間はつぶせた。

夕方から会の美しい女性の案内で山のスライドを見に行く。題して「山への道」（Der Weg zum Berg）という。

女性のドライブでホテルへ戻ったら、今晩は皆さんに小豚の丸焼きを御馳走するという。若い衆が外でその小豚をグルグル廻しながら焼いていた。こういう風物ははじめてなので私は写真にとっておいた。帰国してからそれらを数枚送ったがまだ返事はない。

整備されている装備品

◇UIAA旅日記◇ ③

（米国、カナダ、日本）吉沢一郎

10・16（水）三井物産訪問、国連その他を歩く。旅程再編。

10・17（木）聖パトリック寺院、ロックフェラー・センター、KLM。

10・18（金）NYよりボストン、カーター夫妻に連れられ、ホワイト・マウンテンスにある別荘へ。

10・19（土）ワシントン山（1917m）へ車で登る。夕方、アンソルド夫妻現われる。

10・20（日）アンソルドにエベレストでの話をきく。午後ボストン経由ミルトンのカーターの家に泊る。

10・21（月）アン夫人がハーバード大学案内。ボストンからNYへ。

10・22（火）エクイタブル生命訪問、AACの前で森脇君からクリンチにバトン・タッチ。マッカーシー、ウィスナー、ハートを加えて昼食。ラ・ガーディアよりワシントンへ。

10・23（水）クリンチがワシントン市内外を案内、夜スライド。

10・24（木）ベッツィ夫人が残りを案内。ダリス空港よりロス・アンジェリスへ。バサデナ泊り。

10・25（金）一橋山岳会の高崎、中川両君に会う。クリンチの元の家で図書室を見てビックリ。まだ半分も引越してない。ウェッドバーグの家でAACの支部会に出る。ローガン南稜のスライド。

10・26（土）シエラ・クラブの委員会でロビンスに会う。本屋のドーソン訪問、シエラの大会に出席。ネルソン氏宅泊り。

10・27（日）シエラの支部ミーティングに参加（郊外）。高崎君のマンションの客人ルーム泊り。

10・28（月）ブルーデンシャル生命訪問。アスレティック・クラブで物産の招待。三井銀行の小山社長から妙なことをきく。但しあとで訂正。サンセット通りその他見学。

10・29（火）クリンチとサン・フランシスコへ。バークリーのファーカール老の家泊り。シエラ・クラブ訪問、物産で旅程手配依頼。加州大学でW・シリーに会う。夜、AACの支部総会、オーテンバーガーに久振りに会う。（ファーカー家で開催）

10・30（水）空港でクリンチと二日ばかりの別れ、サクラメント経由リノへ行く。エチュバリーア家泊り。

10・31（木）ネバダ大学見学、シエラ・ネバダの峠まで往復。ハロウィーン休日。妹さんの家泊り。

11・1（金）リノからサン・フランシスコへ戻る。ビクトリア泊り。

11・2（土）サン・フランシスコよりシアトルへ。シャスター山見ゆ。オリンピック泊り。エマーソンの家でクリンチ、シェーニング、ホーンバイン等と歓談。

11・3（日）イーメル・ホテルに移る。シアトル見学、ミズーリ号、タコマ、ボーイング工場。

11・4（月）エブスタインとホイッテカー訪問。彼は大きな運動具屋の共同経営者であるが、その背の高いのには驚いた。小刀と磁石を買い、型録を数部貰う。これはお土産である。夕方、バンクーバーへ飛びアボッツフォート泊り。

11・5（火）P・シャーマンと会う。夜、ACCの支部総会出席、マンデー夫人に会う。

11・6（水）市内見学、スクォーミッシュ・チーフへ行く。（桜内支店長の運転）

11・7（木）市内見学、午後四・五〇JAL。アンカリッジ（一時間休憩）

11・8（金）夜八・四五、羽田着。（完）

ケルバン博士講演会③

五十嵐高志

警報の実例を次に示します。

「月曜日以降、ローネ（Rhone）河及びライン（Rhine）河以北、ヴァライス（Valais）の西側およびグリソン（Grisons）中央、および北のアルプスには、三十ないし五十センチの新雪が降りました。西ないし北東から強風の下、比較的低気温の場合で、風下斜面には大量の雪が積りました。これらの地域では、なだれ危険度は非常に高く、稀れにしか起らないようななだれ、なかんずく、東向きおよび南向き斜面から崩落するものをも考慮しなければなりません。危険になった交通機関は閉鎖し、無防備の居住地域は退避する様に勧告します。ヴァライスの他の地域、テスシン（Tessin）エンガディン（Engadin）では、局地的な板なだれ（面発生表層なだれ）の危険が現われています。ここでは東向きおよだ、南向きの二斜面が特に危険です。」

この警報は毎日観測の例に用いたと同一日にあつかわれたものです。

普通、この文章は、なだれ専門家グループ内で練られた後、テレタイプで情報局に送られ、さらにそこからラジオ放送局、電話局、テレビジョン局、新聞社に送られます。

利用者は次のような方法で、なだれ情報を知ることができます。

一、毎週金曜日、正午のラジオニュースで、天気予報と一緒に放送されます。

二、毎週金曜日の夕方、テレビで放映されます。

三、金曜日の定期放送以外の中間臨時警報は、昼食時のラジオニュースで、また非常事態には夕方のニュースでも聴けます。

四、新聞は記述された原文のままが載っているという点で優れているが、事態の進展より遅れて報道されるのが普通です。

五、非常に便利なのは電話で、ダイヤル百六十二番を回せば何時でも最新の警報を、天気情報と一緒にテープで聴かせてもらえます。

この電話サービスの御蔭で、ヴァイスフルヨッホの研究所では、何時でもなだれ情勢変化の追跡に追われています。

四、なだれ警報の応用と価値

警報の有用性を評価することは非常に困難です。一体、警報で人々が時宜に適した行動をとり得るほど、充分詳細な勧告ができるでしょうか？。また人々は警報の助言に本当に従うでしょうか。

私は外出しようと計画している人達に「なだれ危険の可能性があるぞ！」という意識を思い出させさえしたなら、多くの安全が得られるものと信じます。危険斜面に立ち入る際のわずかの躊躇で、命が助かるかも知れません。なだれ危険はゆっくりと醸成され、そして突然襲ってきます。外部からの呼びかけ、警告、確実な行動に関する勧告というものは、他人に対して責任を負う立場の人々に働きかけ、旅行の中止、道路の閉鎖、あるいは家からの避難の決断に踏み切らせるでしょう。

なだれ警報が出される（発令される）以上はその警報を無視することは重大なことであります。なだれ被災者数が激減してはいないという事実にもかかわらず、私は、なだれ警報が非常に効果的だと主張します。

過去二十年間にスキー人口（なかんずく登山体験のないスキーヤーの数）が、激増したので、なだれ犠牲者の数も、この保護対策がなかったら、恐らく倍以上に増加していたでしょう。

最近のなだれで、予告や退避のお陰で、命が助かった人々の名前を挙げることもできます。

なだれ予報組織の効果を保持しようとするなら、熟考すべき大切な一点があります。もし、警報がなだれ危険の消長に追随せず、一定レベルの危険度に停滞し、スキーヤーは有利な条件をも決して認めないならば（注・何時も危い危いと警告していて、きょうは大丈夫だということをいわないこと）、ただちにその信頼を失い無用のものになってしまうでしょう。だから、警報の文章を書く人は、優れた音楽家のようにあらゆる可能な限りの抑揚を用いるべきであります。すなわち、警報の構成にはいくぶんの芸術性が、心要だということを意味しています。（完）

会員章余談

武田久吉

会報『山』二八三号（昭和四十四年一月）に、永原氏が本会の現行会員章について書いておられるが、それに少しばかり付け加えると、旧会員章は、大正の初め頃か、私の外遊中に、高野君が画家の武井真澄氏に図案を依頼して作ったもので、何の順序もなしに会員に手交したものらしく、平会員、幹事、名誉会員の何れかによって色を異にしただけで、番号は打ってなかった。

私は帰朝後幹事のを渡されたが、山行の時これを佩用したことはなかったので、それがどんな効果をもたらしたかよくは知らなかったが、山小屋で優待されたとか、松本から大町への私設の信濃鉄道では、乗車賃の割引きをしてくれたなどの話を耳にした。

大正八年頃であったか、大阪の某会員が、それを会員外の人に貸与した云々の話が伝わってから、俄然問題となり、会員章を変更しようということで、梅沢、中村の両君と私とが委員ということになり、寄り寄り相談したこともあったが、外部の人に委嘱したりなどはせずに、三人の間で考えようという程度であった。幹事や評議員から、多少の意見は提出されたとしても、具体的な図案を寄せた人も無かったので、モノグラムに興味を持っていたので、私がJ・A・Cを組み合せた縦長のものを描き、その周囲を線で囲んだら楕円になった。この楕円もフリーハンドで描いたもので、長軸と短軸の比を規則通りに測り、その中にモノグラムを嵌め込んだのではない変則的のものである。何分興味はあっても経験の無い素人芸であるから、仲々思うにまかせず、二枚描いて二人に見せたら、これで宜しいというだけで、両君とも何も描いてはくれなかった。

山へ付けて行っても落ちないようにするにも考案に骨が折れた。

いよいよ出来上って番号を打つ段になって、発起人を初めとし、他は入会の年月に応じ、総てアルファベット順にしたので城氏が一号となり、私が五号となって、皆記帳してあるはずである。そして旧会員章の所有者にはそれと引換えに渡すこととし、その面倒には梅沢君が当ってくれた。

何せ長年会務一切を一人でやっていた高野君が神経衰弱だかになり、事務所が急に私の家に引き移り、散々遅れた会誌の発行を、年度と合せることや、会務の刷新等編集の木暮君や記録兼会計の梅沢君の助力が無かったなら、私一人では到底遣りおおせなかったろうと思う。

会員章の下図の詳しい方は、事務所がお茶ノ水にあった頃、会に寄贈したが、間もなく紛失したらしく、第二のものは二、三年前まで私の家にあったが、これも今では見当らない。本物が出来上っているのだから、下図などは疾に御用済み故、無くても一向さしつかえはないであろう。

マスッジの冬

西村清一郎

前略、1月11日チトラルを出発。プニにて三日間、プニ・ゴルの偵察を行なった後、22日マスッジに達しました。目前に聳えるドドロガースに登ってみようと話していましたが、天候がひどく悪化し、17日～27日まで降雪が続き、平地で新雪が50cmを越す有様で、これでは許された日数内での登山はとても覚つかない。また雪がこれ以上降り続けば帰路を断たれる恐れも出てきたので、1月28日、天候の好転をまってマスッジを出発、一応プニまで戻りました。

しかし二日間の晴をみたのみでまた夜半にすらナダレが出る仕末で止むを得ず、全面的に踏査を断念、急いでチトラルに引揚げました。

一月初旬には殆んどなかったチトラルの雪も、20数cmをみて、ジープも走れず、ロワライ峠もしばらく駄目なので待機ということになりました。

2月11日、飛行などとは全く考えられなかった天候にも拘わらず、半月振りに飛行があり、初めての予約日に飛ぶという、全くのラッキーで無事ペシャワールに出ました。

山はまた雪らしく良くも飛んでくれたと喜んでいます。全く何の踏査も出来ず残念ですが、3名とも風邪の他は元気ですから御安心下さい。

69・2・19付、ペシャワールにて

（吉沢宛）

× × ×

一生の旅と古書

古家実三さんを偲んで

☆　☆　☆

小野　幸

昭和三十八年であった。月刊誌『日本古書通信』に旧会員の古家実三さんが「古本仕入旅日記」という続きものを記されており、その中の「白馬岳登山」の項で

「大正四年七月二十五日、糸魚川を発して白馬岳に向かった。道は姫川の溪流に沿うて南行する。日本全国でヒスイの原産地はただこの溪流のみと聞いたのは遥かに後日である。

第一日は姫川溪谷の奥の果、人家七戸の山村木地屋の民家にこうて一泊し、翌日三里半の山路を辿って蓮華温泉に到着して少憩した。温泉から頂上まで二里半、途中路を失って草むら、偃松の林、雪溪をやたらに登り登って遂に頂上の一角に達した。偶然にも山岳会員志村烏嶺氏（千山万岳の著者）と邂逅し、頂上の山小屋に泊ることになった。六帖程の石室に松本商業の生徒も加えて二十人余りが雑魚寝した。

翌日、信州の四ツ屋に下って山木旅館に志村氏と同宿して夜おそくまで語り合った。互の体験談、雑誌『山岳』の話、山岳会員の消息など。氏は高頭氏（日本山獄志著者）は越後の豪家の主人で『山岳』の刊行には氏の物質的援助が多大であること、氏は熱心な研究家で蔵書は非常に豊富であること、その夫人は新潟県第一の大地主の娘であること、また辻村伊助氏（スウイス日記著者）は小田原の豪家の若主人で夫人はスイス生れの美人であること等々果しない雑談が続いた」

と記されていた。わたしはこの記事を読んでフト、会員の茨木猪之吉さんもこの年に行っておられたことを思い出して、古家さんにといあわせの手紙をさしあげた。すると昭和三十八年三月四日付のお便りをいただいた。

「日本古書通信の拙文御愛読下さいます由汗顔の至りです。扨て、御葉書に依りまして古い日記を精読して見ました。白馬登山の日記は可なり長文にわたっておりますが、古書通信の原稿はその性格上登山記を極力制限しましたので、大ざっぱに記憶に残っている点を概略書いて見た程度で、執筆当時も日記を読み返す労を省きましたが、本日御書面に接して、日記を読み返して見ると随分いろいろのことを書いております。

志村氏とも会話も長文にわたっており、御来迎の光景をありありと見て、所謂来迎仏が雲に乗って三尊の形で現われる光景はここから生れたものであることもはっきりわかったことを書いております。光線の関係で二人の場合は二尊像の形で現われ、三人の場合は三尊の形で現出する原理をこの時明瞭に理解できたことはすばらしかったと記憶します。

志村氏と共に雷鳥の子を一羽づつ捕えたが、志村氏は雛を啼かせて親鳥をおびき出し、しきりに石を投げて親鳥をとらえようとして成功しなかったことや、ついその前に三井男爵の息子たちが山民の伝説を無視して乘鞍大池を泳ぎ廻り、その夜ついに豪雨が降ったこと、池からの帰途雷鳥を撃ちそこなった拍子に転倒して自身の腕を撃って負傷し、大騒ぎになったことなどを志村氏が話されたことなども詳しく書いております。果して茨木氏のことが目に止りました。日記には左のごとく認めております。

『志村氏は猟銃氏（猟銃を携帯している人物の意）と心易げに語っていられた。長野商業学校の先生と生徒と外に長野地方裁判所の判事等の一行であるということがわかった。頂上から下ってゆくと程なく石室に着いた。室は客と人夫でもう一ぱいになっていた。

山岳会員中、新進の洋画家として兼ねてから聞いていた茨木猪之吉氏に紹介された。茨木さんは痩骨と仙骨を兼ねた顔のどこかやらに子供でも甘えそうなやさしみ、温味のある人だった。

京都の大学生四名が人夫三名を伴って登って来た。未だ大雪溪を登っているのが見えていたという。今晩は非常に賑うらしい。

二つの石室にはとても収容し切れないというので茨木さんと志村さんとは天幕に寝るといって人夫を連れて蕊平まで下って行かれた。あとから東京の高商生五名が人夫二人を率いて登って来た。

夕方、長野商業の（古書通信に松本商業と書いたのは私の記憶違いでした）生徒が人夫と二人で雷鳥を生け捕にして帰って来た。何でもステッキでなぐり付けたのだそうだ。猟銃先生が帰って来て「その雷鳥を寄附しろ、剥製にして標本にするんだ」といい「今度は雷鳥がほしいばかりに登ったのだ、ほんとに」と言い足した。乱暴にも雷鳥を取り上げてしまった。そして雷鳥の肉は料理して、あすの朝味噌汁にしてしまうそうだ。』（以上日記から）

翌日は好天に恵まれ、実に素晴らしい展望をほしいままにすることができました。朝飯の時、快潤で元気な商業生が私の飯に味噌汁の雷鳥をどっさりかけてくれたことなどを嬉しそうに書いております。

私の種々な登山の経験中、雷鳥の肉を味ったのは後にも前にもこの時のみでした。この白馬登山記を日記通りに書けば古書通信半年分位の原稿ができそうです。最早半世記近い昔話となりましたが、日本登山史の資料になりそうなものも多少はあるかも知れません。その後、猪木氏とは別れ、志村氏は一足先きに下山されましたが、四谷の山木旅館で同宿したことは古書通信に書いた通りです。」

そして、兵庫県加西郡北条町坂本、古家実三と最後に記されてある。この古家さんが昭和四十一年の暮、十二月二十六日に亡くなられたのであった。わたしは古家さんの山暦が知りたいと遺族の方にお願いしたところ、次のお便りをいただいた。

「拝復　再度に御電話を戴き誠に御芳情の程、有難く厚く御礼申上げます。地下の父本人もさぞ喜んでいることと存じます。

古家実三　明治二十三年三月十八日生

戒名　白雲院温古実遊居士

昭和四十一年十二月二十六日午後十一時死去

登山の方は、明治四十五年秋、二十二才、作州津山より山陰九州の旅、その中で那岐山、大山、三瓶山に登山、断魚溪に遊ぶ。九州では耶馬溪、彦山、由布岳、霧島。

なお、四十五年三月、朝鮮旅行、同年二回目の四国旅行、石鎚山登山。同年六月二十八日から北陸旅行、立山登山。同年九月二十一日東北旅行、九月二十八日岩木山登山。

大正二、三年、白山登山。

大正四年、白馬山登山。

大正九年、弟と二人で上高地、焼岳、槍ケ岳、常念、大天井、燕岳。

大正十二年、朝鮮、中国への九十日の旅行、金剛山。

大正十三年、台湾旅行。

以上本人が生前に講談社刊の雑誌『日本』七巻十号、昭和三十九年十月号に「古本屋の人生日記」として発表した中より摘録しました。誠に要を得ませんが悪からず御許し下さい。

姫路市伊伝居南町　白雲堂書店

古家歳雄」

そして、別送で古家さんの短冊をくだすったのである。歌をつくられておられたことはこの時に知ったので、和歌が残っておったら数首お見せ願えないか、とのお願いをした。未亡人から早速、達筆の手紙をいただいた。

「未だ御拝眉申上げておりませんが毎々御名前は存じ上げて居ります。さて白馬登山に関する歌とのことにございますが、いづれも下手な歌ばかりでございまして、お目にかけますこともどうかと思いましたが、お言葉に添いまして左に少々記して見たいと思います。よろしきようにお計り頂きたくと存じます。

古家みゆき。

実三歌集

白馬山途中

行商に教えられたる大町の
里は是かも大杉立てり

白馬山腹

美しき月の光に照されて
高き山あり深き谷あり

白馬山中

黙しつつ大森林を登り行く
臭なきて人の世遠し

糸魚川にて

白馬の山の残雪一目見し
かがやきわたるわが心かも

白雲の軽く漂ふ白馬岳
あすの天気に心ときめく

山小屋に男三人居りけり
中の一人は名にきく萬蔵
萬蔵は峯を指さしいちいちに
みねの名を呼び無邪気に語る
大蓮華八葉蓮華それぞれに
雪を光らせ聳えけるかも
岩陰の玉の真清水手に掬ひ
のめばつめたし日本一かも
蓮華温泉
ゆの人の真実心の嬉しくて
微笑ひつつ湯にひたりけり
険路百町
深やまの木々の姿尊くて
なみだくみつつ辿りけるかも
残雪埋谷
残雪をはじめて踏みし心持
あなかし二夢人には語らじ
山いちごよく熟したり蓬莱の
珍菜と言ひつつ貪りて食ふ
山　雲
やま雲は狂ひ乱れつ躍りつつ
しばし不安にわれをとらへつ
残雪の絶間絶間に花咲ける
高嶺小草の生のよろこび
いっしかも道をうしないひたぶるに
死なら死ねと雪をよぢ登る
何とう美しき谿ぞとしはしば
ふり返りつつ雪をよぢのぼる
峯続き小さき人の影三つ
見つけてわれは蘇生りけり
いやどうも奇遇でしたと志村氏は
頻りに山を語り給ひし」
なお大正三年九月発行『山岳』九ノ二の新入会員欄に
兵庫県加西郡下里村ノ内坂本村　古家実三　紹介者　小島久太、高野鷹蔵
とあり、同『山岳』二十三ノ一の自第一年至第二十年総目録の中にも、
「剣山に登るの記」古家実三　第八年ノ一
「山陰の名山奇峡」古家実三　第八年ノ三
「耶馬溪を跋渉して裏道より彦山に登る」古家実三　第九年ノ一
「わが郷国の山々」古家実三　第十年ノ一
など散見できる。とにかく古い会員であった古家実三さんは古書と旅に一生を終えられた方であった。
（四三・一〇・一三）

会費値上げ案

常務理事会

本会ではかねてから財務の安定化と円滑化をはかり、財務面から生ずる会員サービスの低下防止に配慮していましたが、昨今の諸情況から会費の値上げを検討すべき時期にきたと判断した次第であります。値上げ案については左記の案を二月六日の理事評議会で決定し、四月十九日の通常会員総会にはかることになりました。何分のご協力を得たく、よろしくお願い申し上げます。

会費値上げ案

I　値上げ幅

①通常会費　東京、千葉、埼玉、神奈川在住会員三千円（現行二千円）そのほかの地域在住会員二千五百円（現行千六百円）

②終身会費　入会後五年以上八万円（現行五万円）、十年以上七万円（現行四万円）、二十年以上五万円（現行三万円）、三十年以上四万円（現行二万円）、四十年以上三万円（現行一万円）

II　実施時期

①通常会費は昭和四十四年度分より。終身会費は昭和四十四年四月一日申込み分より実施する。

②昭和四十四年三月三十一日までに四十四年度会費を納入した会員からは不足分を追加徴収するが、その他については遡及しない。

③その他　本件は四月の定例総会の議事案として正式決定する。

値上げを必要とする理由

I 神田新ルーム移転後の本会財務状況はおおむね次のとおりであります。

収　入

経常収入四、八〇〇、〇〇〇円（内会費三、六〇〇、〇〇〇円）事業収入ほか、二、八〇〇、〇〇〇円

支　出

運営費四、七二〇、〇〇〇円（内家賃一、〇七三、〇〇〇円、人件費一、一五〇、〇〇〇円、通信費一、〇〇〇、〇〇〇円、事業費三、五五〇、〇〇〇円（内山岳二、〇〇〇、〇〇〇円、会報八〇〇、〇〇〇円）

以上のようで、このまま推移すると年間約七十七万円の不足を生じる状況であります。会員一人当の還元を考えますと、山岳七百円、会報三百六十円、通信費その他三百円で千三百六十円となり、会費の八十五パーセントがそのまま会員に還元されている状況であります事業収入でようやく人件費、家賃を捻出している形となり、このままでは諸物価の現状その他から現在会員サービスが維持困難になりつつあります。

II 神田ルーム移転に当っては、このような現状はほぼ予想されたことではありますが、新ムールへの移転で、海外との関連における会としての体面はもとより、図書室をはじめとして、会員サービス、あるいは事務処理なども内容的にかなり向上ぶりで、六十余年の歴史をもつ当会としては、少くともこの程度のルール維持は最低限として図る必要があると考えるわけであります。

III 現在本会の資金的な蓄積は概算二百万でありますが、本会が何らかの行動をする場合はなはだ不安感をもたざるを得ず、現今の経済諸事情からしてこれを四、五百万円まで増額してゆきたい。

IV 値上げによる会の増収額として考えるとき、現在会員総数二千五百名会費納入率が七十パーセント前後であり、これの低下も考慮に入れると値上幅五百円程度では不足額を解消するにとどまり、当面の物価動向をみれば二年おきくらいに会費の値上げを実施せざるを得ないことになります。（これは前回の値上げが原宿時代四百円であったことからもわかります）値上げ幅について九百円から千円とかなりの金額になりますが、年額二千五百円から三千円という金額は他の諸クラブその他にくらべて著しく高いものではなく、月額約二百円という金額はとくに負担とはならないのでないかと考えます。従って九百円から千円の値上げをいたしますと、会の増収額は低くみても概算百十二万円から百三十万円と見込まれ、これにより事業内容の充実、その他資金の蓄積なども可能になるほか、値上げサイクルも五年以上となり得ると考える次第であります。

III 結　び

①以上簡単な説明ではありますが、クラブではクラブ員の会費によって健全運営をはかるといった趣旨を堅持する建前からして常務理事会としては会費値上げに踏み切りたい所存であります。

②最後に事業収入の増加をはかるべきだという意見もありますが、現状では当初投入すべき資金もなく、かつ人的面で専任スタッフをおく程度の事業でなければとても会の財政に寄与する収入はあげられないという結論であります。

学生部クル登山隊

学生部の仲間が集まり、この四月にバンジャブヒマラヤ、クル地方へ出かけることになりました。

(1)名称

日本山岳会学生部クル登山隊

(2)登山目標

マラナ氷河末端にB・C設営後トス氷河に入り

カナロバ（五八一〇m）

無名峰（五九四四m）

ホワイトセール（六四四六m）

(3)登山期間

六月四日～六月三十日

なお出発は四月十四日横浜発M・Mラインにて

(4)隊員　森本勲夫（隊長・長崎大）

成田義宏（都立大）

梶　正彦（上智大）

星野和久（青学大）

クル地方は、日本では、なじみの薄い地域ですが、マラナ氷河源流にはインドラサン（六二二一）、ディオティバ（六〇〇一）があります。この地域ではインナーラインの外側にいくつかの六〇〇〇m級の山々を持ち、入域にさしたる困難はありません。この地域の登山基地のマナリへは交通の便もよく、またアプローチも非常に短かいので、小登山隊にはもってこいの場所とおもいます。

なお登山終了後は、カラコルムやネパールヒマラヤの山々を見てくるつもりです。

（梶記）

訂正　山二月号「この一本展解題・下」の田辺氏の記事中、五ページ上段Andre'→Audr'e, D. Arcy→D'Arey 二段目 Vonity→Vanity, クロア→クロフ、とそれぞれ訂正します。

北海道の山を滑る

関口周也

二月八日午後の便で、広谷光一郎、村井田博、他のスキー仲間二名とともに札幌へ飛ぶ。先発の堀川美司郎と合流、旅装を解く間もなく、直ちに北海道勢の待ち受ける日赤会館へおもむく。北海道勢というのは、昨年の初秋に、シイエラ・クラブのキンボール博士と札幌を訪れたときに会った、JACの会員達だ。再会の喜びを感じながら、前日、上がったばかりの猛吹雪の跡も生々しい街を急ぐ。

この会合は、別項で相川修氏が書かれているようにJAC北海道支部（正式の名称がこうなるかどうかは不明）設立の準備をもかねているようであったが、とにかく我々東京勢を大歓迎してくれて、終始にぎやかなものであった。北海道勢と東京勢は、もう何年も前からの仲間であるかのように、何べんも杯がかわされ、用意された生ビールの樽が空になるのも、瞬く間であった。

今回の北海道スキーツアーのキャッチフレーズは「バッチリ飲んで、ガッチリ滑ろう!!」（北海道勢の立案による）というものであったが、この第一歩が、東京を発ってから僅か三時間後に、早くも開始されたわけである。

翌二月九日朝、自ら北海道の山の案内を買って出てくれた氏家民雄氏と、折りからの豪雪のため二日かかって帯広から、かけつけてくれたラッセル要員であり、十勝の熊と名乗る大山幸太郎氏とともに、ニセコ連峰の最奥の温泉、チセへ向った。札幌地方は快晴であったが、山はやはり吹雪であった。ここで、すでに自動車でかけつけていた塩田良仲、淡川舜平、浅利欣吉の各氏と一緒になり、午後一杯ゲレンデで足慣らし。

チセは、最近出来たばかりのリフト一基があるのみで、実に静かなところ。岳樺の大木が多く、樹間を縫って滑る楽しさは格別で、本州のスキー場では到底味わうことができないものであった。

翌くる二月一〇日は予定通りチセヌプリへ登る。一、〇〇〇メートルから上は、猛烈な風雪、視界わるく、お目当てのニセコアンヌプリも、周囲の山々も見ることができなかった。塩田良仲氏持参の日の丸の旗を、頂上のポールにしばりつけたのち、スカブラのきびしい大斜面を、各自、思い思いに滑りおりる。

一、〇〇〇メートル付近まで降りる頃には、頂上を覆っていた雲が晴れ上って、チセヌプリがその全ぼうをみせて、我々を見送ってくくれた。深雪帯に入りフィルムクラスト状の雪にだまされて、一回転する大転倒。股間に紺青の空をみて半ば雪にうずまったとき、〝北海道の山を滑る〟実感が始めて湧き出てきた。

ニセコの王様こと織笠巌氏の華麗なスキーに導かれて、森林帯を抜けチセへ下る。登頂を祝ってチセハウスで乾杯、このときのビールの味は忘れられぬものとなろう。

チセより比羅夫スキー場へ、場所を変えて一泊。祭日の前夜とあってどこの宿も満員であった。

次の日も天気に恵まれたが、ニセコアンヌプリの一、〇〇〇メートルから上部は、強風とガスで一寸先も見えない状態であった。けれども、氏家リーダーの適確な登路判断によって難なく頂上への稜線へ登ることができた。頂上へ立ち、強風に堪えながらねばること四十五分、雲が晴れて待望のニセコの山々が眼前にひらけ、羊蹄山もその秀麗な姿を目前に現わす。比羅夫スキー場までは快適なスキーの一語につきる。

しかしながら大斜面ですれ違った、新妻徹氏に率いられた札幌ヤングパワーと自ら称する面々、八人の背にあるサッポロラーメンを食べそこなったことは、かえすがえすも残念であった。

比羅夫スキー場は、好天気と気温上昇で雪はベタベタと化し、上越地方のそれとさしてかわらなかった。ラウドスピーカーから流れる音楽や、疾風の如く他人のそばを滑り抜けるカミナリスキーヤー、そして食堂や休憩所に満ち溢れている人々等、本州の有名スキー場にある俗臭がここにも持ち込まれていた。

ふたたびリフトに乗って、ゲレンデを滑るという気には到底なれなかった。連日の登山の疲れのせいもあったが、強風を受けて毅然とそびえるニセコアンヌプリの頂きの壮厳さや、大斜面の壮大さに深い感銘を覚え、山へ登ることができた自分自身、大きな喜びに満ち足りていたからであろう。

東京からの仲間達は、札幌からなおもティネスキー場へ赴くも、私は一人、札幌にとどまり、三日間にわたって心ゆくまで楽しんだニセコの山々に想いを戻した。

それにしても、今回のスキー行がかくも楽しいものになったのは、最初から最後まで行をともにして案内して下さった、氏家民雄、塩田良仲両氏を初めとして、北海道在住の多くの会員の方々のお陰であった。

一日も早く北海道にも支部が生れて、日本各地の会員との交流が盛んになり、今回のようなすばらしい機会が、より多く持たれるようになったら何と幸せなことであろう、と考えるのは私ばかりではないと思うし、また、そうなるのを願わずにはいられない。

☆　☆　☆

北海道支部設立の相談

相川修

豪雪後の猛吹雪もようやくおさまった二月八日夜、東京より会員四名に加えて同勢六人遠路来札。曰く、広谷、村井田、堀川、関口の諸氏その他二名。

翌日よりニセコアンヌプリ連峰へスキー行に出掛ける予定とのことながら、折柄JAC北海道支部設立の相談のこともあり、ささやかな歓迎パーティ開催、生ビールの木樽の満を引きつつ忽ち旧知の如く話に花が咲き、添うるに佐々プロフェッサーの「空から見た北海道の山岳風景」のスライド、平野君制作に関わる「六月の石狩岳、上フラノ岳、芦別岳（深田さんを案内して）」の八ミリ映写に時の移るのを忘れ、定刻九時を過ぎること四十分、終って凍てつく寒気の中をそぞろ街中散歩を行なう。最低気温零下十二・九度と翌日の気象庁の発表であった。成程、東京勢の曰く「随分冷えますネ」と、小生は「零下七度位なものでないですか」と澄ましている。次で道産の生一本の燗酒に身を暖めて元気者は更に紅灯の巷へと歩を延ばしたのであった。多分ウィスキーに身を托して何処まで滑降して行ったことやら。

閑話休題。東京の連中に再三、再四ねじを捲かれながら北海道支部の設立も、話があってからすでに三年、何時までも這い這いばかりしているのもどうか、このあたりで歩き出さなくては、と更にハッパをかけられる。本年は米国のシェラクラブの連中の来日のこともあり、早く支部を作って、接待その他についてJAC本部との連絡を密にせねばなるまい。とも角規約を作り、賛成者だけでも支部をつくろうと話がまとまったことであった。いずれ具体化して本部の指示をままつことになりましょう。

☆　☆　☆

□出席者佐々保雄、塩田良仲、氏家民雄、芳賀孝郎、新妻徹、浅利欣吉、高沢光雄、中野武司、平野明、淡川舜平、大山幸太郎、相川修、広谷光一郎、堀川英司郎、関口周也、村井田博、須藤隆、大塚淳、以上十八名（順不同）

近藤茂吉氏逝去

本会名誉会員近藤茂吉氏は昭和四十四年二月二十二日聖路加病院で逝去された。葬儀は二月二十七日午後一時半から外神田の神田キリスト教会で行なわれ、松方、藤島、神谷各名誉会員をはじめ多数会員が参列した。

近藤氏は明治十六年一月七日千葉県海上郡飯岡町に生まれ、音羽豊山中学からイギリスのグラスゴー大学に留学し、ウイスキーの研究を重ねられた。明治四十年十月東京で輸入業近藤商店を創立以来終始日本の輸出振興に尽力された。明治四十三年十二月高野鷹蔵、三枝威之助氏の紹介で日本山岳会に入会（会員番号二六〇番）昭和二十五年四月本会名誉会員に推された。昭和四十年四月二十九日勲四等瑞宝章を受けた。

村山隊昭和基地に還る

昭和基地―南極点間を往復し、観測旅行を続けてきた村山雅美隊長ら極点旅行隊の十一人は、昭和四十四年二月十五日午前十時（日本時間同日午後四時）五、一八〇キロ（稚内―鹿児島間の往復距離）を走破して、昭和基地東方二十キロにある終点のF16に着き、「ふじ」からのヘリコプターで同日午後五時三十分（日本時間午後十一時三十分）昭和基地に帰った。隊員は平均六キロやせているが全員元気である。

☆　☆

ソ連岳界一九六八年・雑報

袋　一　平

シーズンがきたのにスキーがない。どうしてくれるんだ、いきまいても相手がお役所では手応えがない。日本でいえば農林省といったところがスキーを製造するのだが、毎年のぞろっぺえに腹を立てて、コムソモリスカヤ・プラウダ紙は一九六八年四月に、同省次官代理トロシンなる男を呼び、六八―六九年シーズンに備える円卓会議をひらいた。トロシンは虹のような画面を描いて、結論したものである。

「だからね、心配する根拠はまったくありませんよ」

その冬がきた。相変らずスキーは手に入らない。スキー人口は年々増えていくというのに、スポーツ用具の店はガランとして、お客の顔を見るが早いか、なんにもいわないうちに「ニェート」(ない)とぶつけられる。新聞社には憤慨の投書が山と舞いこむ。たまりかねて、こんどはソ連閣僚会議体育スポーツ委員会中央スポーツ商品局というすごく長い名前の役所に苦情をもちこむ。その答――

「そうですな、今年もまたスキー製造プランは遂行されないようですな」

これは六八年十二月中旬の同じ新聞で見た話。日本のスキーヤーは幸せだといいたいところだが、猫のひたいほどのゲレンデでモタモタするために、選手用のスキーや靴を買わされ、足を折っぺしょるのと、どちらが幸せか――おそまつな一席。

×

カフカズ主峰エリブルース(五六三三m)のテルスコル氷河に近い二〇〇〇m地点に建設中だった八階のテルスコル「山小屋」が完成した。収容人員五一〇名。映写設備と舞台がある大ホール、食堂、乾燥室、スキー室、図書室、休憩室――いたれり、つくせり、さあいらっしゃいというわけだが、さてサービスは?

×

六八年夏、南西パミールのピーク・エンゲルス(六五一〇m)に「トルード」(ロシア勤労者スポーツ同盟)隊が登頂した。隊長ボリス・ロマノフ。九日を要し、六名が頂上を踏んだ。

北西パミールのピーク・コムニズム(七四九五m)には元老ヴィタリ・アバラコフ指揮の下に集中登山が行われた。ビョートル・ブダノフのレニングラード隊は東壁を、ゲリ・ステパノフのカバルダ・バルカリア隊は北壁をのぼり、ヴィタリの息子オレーク・アバラコフのモスクワ隊は氷河をつめてのぼった。三方面から同時登頂したのはこれがはじめてだという。

パミールには未踏峰がまだたくさん残ってるが、ミハイル・レヴィンのチェリャビンスク(ウラル)隊は意欲的にフェドチェンコ氷河源頭に向った。まず五九六〇mにのぼり、ロコソフスキー元帥の名をつけた。次に六一五〇m。これには作家バウストフスキーの名をつけ、一番むずかしかった六二三六mには宇宙船建造で知られた学者コロレフの名をつけた。この縦走をやりとげたのは一四名というが、この命名法はどういうものだろう?

×

ナリチク十一月十五日発タス特電によると、六八年度高所テクニカルクライミングのソ連選手権をとり、金メダルをかち得たのは、カバルダ・バルカリア(ナリチクはその首都)隊だという。九日間のうち七日間はたいへんな悪天候だったが、八名の一隊はほとんど垂直の二〇〇〇m中央壁をよじのぼってピークOGPU(六〇五五m)の頂上に立った。隊長は高山地球物理学研究所のゲリ・ステパノフ。このおっかない名前の山はたしかコムニズム地区にあるはずだから、これは前記アバラコフの集中登山の一翼として行われたのだろうとおもう。この辺の報道はソ連ではずいぶん無神経なので、ツジツマを合わせるのがほねだ。

またドゥシャンベ(タジク首都)六八年八月二十七日発タス特電は功労マスター級四名が「有史以来はじめて」コムニズムの南西垂直壁を完登したことを報じている。これはアバラコフ計画とは別のようである。メンバーはアナトリ・オフチンニコフ、エドゥアルド・マスロフスキー、ウャチェスラフ・グルホフ、ワレンチン・イワノフ。

一〇名より成る遠征隊は六八年六月中旬に早くもパミールに入り、二ヵ月もこの壁を研究した。垂直の壁の高さ二五〇〇m。登路の2/3は岩なだれにさらされている。テントの場所もあるかなしで、空中で眠らなければならないこともあった。

登りつづけること九日。しばしば雪が降って視野をとざしたという。

なおこのシーズンには、他にもまだコムニズムに登った隊がいくつかあり、ボロドキンを隊長とする一隊は、いまから五〇年後、つまり二〇一八年に開封すべき「二十一世紀の若者へ」というメッセージをカプセルに入れて、頂上にいけてきたそうだ。

×

カフカズは天候に恵まれなかったのに、記録的なラッシュをみせたという。なかでも、田村さんが既報したミハイル・ヘルギアニのグルジア隊四五名のウシバ全員登頂は「有史以来」の成功という評判。十一月二十四日の「東京の暁」紙はグルジア閣僚会議体育スポーツ委員会および共和国アルピニズム連盟主催の祝典のもようを伝えている。六六年に来日した同連盟議長ギギネイシヴィリが祝辞、共青中央委書記長がムレケリが賞状を渡し、バラミゼ撮影の同登頂記録を観賞したという。

カフカズにもまだ無名峰あるいは未登峰が残ってるらしい。ジャバリゼ記念グルジア・アルパイン・クラブ会長D・オボラゼ隊の三名は八月十一日、中央カフカズの四〇〇〇m級無名峰にのぼり、折柄詩人ニコロズ・バラタシヴィリ生誕一五〇年祭をひかえて、この詩人の名をつけたいという。この三名のうちの二名はショタ・ミリアナシヴィリとオタリ・ハザラゼで、六六年来日のメンバーである。

×

ちょっと変ったところでは、北ウラル主峰ナロドナヤ(一八九四m)積雪期登頂がある。この山はおよそ北緯六五度、東経六〇度にあって、十月には北斜面は三mの雪にとざされる。フセーウォロド・コチネフ隊八名は十月下旬、南東面からのぼり、氷結の尾根づたいに頂上に立った。

×

主なできごとの一つに、フェドチェンコ氷河のオートバイ突破がある。ソ連中央水理気象局高山岳地球物理学研究所がアカデミー会員E・フョードロフ博士指揮の下に、綿密な研究を重ねて決行したものである。この氷河は長さ七〇キロ、世界最大の山氷河といわれ、氷河上流の氷河観測所への荷あげにはキャラバンでふつう数日かかる。そこでこの輸送問題の解決になにかの手がかりを得たいというわけだ。

実験のメンバーはエリブルースへのオートバイ登頂で有名なナリチクの技術者アレクセイ・ベルベラシヴィリ、地球物理学者ニコライ・ウサチコフ、そしてアルピニストのヨシフ・カヒアニ。結局、わずか四時間で、オートバイは難路を克服し、三名は観測所の越冬員たちから「翼の上のバラ」――エーデルワイズの花束で迎えられた。

ベル氏の談によれば、一番の危険は大きな口をあけたクレヴァスと、日の出とともに氷盤を奔流しはじめる融水の流れだったという。

×

氷河といえば、その厚さをレーダーゾンデで測定することに成功した、と六八年十二月十三日フルンゼ(キルギズ共和国首都)発特電は報じている。ジダノフ記念レニングラード大学と天山物理・地理学ステーションの氷河学者の共同実験によるもので、氷河の厚さと内部構造が非常に正確にわかるとのこと。道具はかんたんで便利としてコンパクトなので、困難な高山条件に好適。すでに南イヌイリチク氷河を「さぐりまわり」、最大の厚さ約四〇〇mに達することをたしかめた。これも世界最初の成果だといっている。

×

十二月二十三日、モスクワの共青中央委でアルピニスト=パラシュチストパミール合同遠征隊の顕彰=追悼式が行われた。ピーク・レーニン(七一三四m)へのパラシュート・ジャンプという未曾有の冒険をたたえるとともにその際生じたパラシュチスト四名とアルピニスト一名(ワレンチン・スロエフ)の死をいたんで、生者にも死者にも名誉勲章が授与された。

この事件についてはすでに「岳人」(六八年十二月号)に詳報されたのでここではこの年度の岳界消息のしめくくりとして記録するに止めた。

盲人キリマンジャロに登山

アフリカの盲人登山者十人が二月二十日正午アフリカの最高峰キリマンジャロに登頂した。タンザニア人二人、ケニア人二人、ウガンダ人三人で山頂までの最後の九百メートル余りの登りに九時間かかった。(ロイター)

図書室だより

新刊図書受入報告（昭44・1）

角川書店寄贈

(1)日本山岳写真集団著『わが心の山―エーデルワイス写真集―』昭・43・12

あかね書房寄贈

(1)第Ⅱ次RCC編『岩と雪の遭難対策』（現代アルピニズム講座 6）昭・44・1

沖允人氏寄贈

(1)沖允人著『ダウラ・ヒマール―西北ネパールの旅―』昭・43・12

川上忠義氏寄贈

(1)『日本航空電子工業山岳部部報 1～10号』昭・43・10

衣笠昌男氏寄贈

(1)紅菱会山岳部『紅陵 追悼号』昭・43・12

酒匂純俊氏寄贈

(1)中央ネパールヒマラヤ地質氷河調査隊著『中央ネパール1965』昭・43・6

山本佗介氏寄贈

(1)山本佗介著『文学碑のある風景』昭・44・1 有峰書店刊

その他

(1)登高会名簿 昭43・12

(2)日本国際地理学会会員名簿 昭・43・12

定期刊行物受入報告（昭44・1）

〔山岳雑誌〕

(1)『アルピニスト』Vol. 2, No. 3

(2)『岳人』No. 259 2-'69

(3)『HIKER』No. 160 2-'69

(4)『山と渓谷』No. 365 2-'69

〔部報・会報類〕

(1)『あしなか』

(2)『北海道自然保護協会会報』No. 6

(3)『兵庫山岳』No. 20 1-'69

(4)『国立公園』No. 229～230 12-'68 1-'69

(5)『京都山岳』No. 524 1-'69

(6)『名古屋山岳会月報』No. 14

(7)『OMCLレポート』No. 230 1-'69

(8)『山嶺』No. 465 1-'69

(9)『自然保護』No. 79 12-'68

(10)『たどろ』1968

〔その他〕

平位剛氏寄贈

(1)広島大学医学部山岳部・山岳会紀誌『岳友』No. 2

美田いね氏寄贈

(1)低い山を歩く会『低山』Vol. 8 No. 43 1-'69

Journals arrived in Jan. 1969

1. Akademischer Alpenklub. Jahresbericht, 63. Okt. 1968.
2. Die Alpen, Jahrgang. 44, 12. Dez. 1968.
3. Die Alpen. Jahrgang 44, 4 Quartal.
4. Alpinismus, Jahrgang 6, 11. Nov. 1968.
5. Appalachia Bulletin, vol. 34, no. 10-11. Nov.-Dec. 1968.
6. Der Bergsteiger, Jahrgang 35, heft 11. Nov. 1968.
7. Chicago Mountaineering Club. Newslettlr, vol. 22, No. 5. Nov. Dec. 1968.
8. The Mountaineer, vol. 60, No. 5. April 1967. Vol. 61, No. 8. August 1968.
10. U.I.A.A. Bulletin, No. 32, Nov. 1968.
11. The Yorkshire Ramblers Club Journal, vol. No. 34. 1968.

バックナンバー欠号の寄贈

1. Deuschen Alpenvereins. Jahrbuch, vol. 80. 1955.

図書委員会報告（43・1）

（一月二十二日本会図書室）

川上、武田、松田、丸山、山崎、野上。

(1)雑誌記事索引の作製について、川上委員よりあった提案を検討した。段階ごとに区切ってやるべきだという意見があり、川上委員は、日本の海外登山の記事から始めたいとのことであった。量や内容、その分野も尨大になるために、ひとまず始めてみてその経過を見ながら目標を定めることとし、目録用カードをとりあえず一〇〇〇枚購入することと決定した。

(2)磯野文庫ネームプレートについて、野上理事より、昨年（43年）の12月27日に完成した旨報告があった。「磯野氏御遺族に感謝を表する会」の主旨でパーティを開きたい旨説明があったが、明細はまだ決定していない。

(3)図書整理については和書の基本目録完成が三月末を目標として行われること、またしばらく休止の状態であった図書の寄贈依頼を開始することとした。

会務報告

二月理事評議員会

（六日午後七時、本会ルーム）

▽出席者 三田会長、吉沢副会長、藤井、丹部、大塚、竹田、広谷、小倉、川森、野上、長尾、山崎各理事、佐藤渡辺、石原、望月、沼倉、辰沼各評議員

▽議事および報告

①来年度役員の件 （藤井）

理事、評議員とも常務理事会に一任してもらいたい。

②エベレスト登山の件 （藤井）

二月十日零時二十分松方氏にカトマンズへ行ってもらい、ネパール政府の意向をたしかめることにした。

③山岳索引の件 （野上）

山岳二十六年から六十年までの総索引が近く出来るので、これを来年度内に発行したい。一部五百円、千部発行で希望者に頒布したい。

④山岳六十三年広告の件 （竹田）

昨年と同額の六十一万円集まった。

⑤日山協指導員制度の件 （辰沼）

日山協では、指導員制度は必要である。適切な研修会をすることが望ましいという観点で、検定方法、一種、二種の区別の必要性などを検討している。具体的方法については時間をかけて研究している段階である。

⑥永原氏辞任の件 （藤井）

永原氏は七十歳になられたので、理事会の申しあわせにより三月一杯で勇退されることになった。後任は岩佐義宗氏（もと気象庁通信所長）を決めたい。

⑦小集会の件 （芳野）

一月二十九日二四八回小集会は西丸氏の「人喰人種に喰われそこなった話」をやって盛況だった。四十七人が出席した。二四九回は二月十九日伊達氏の話、二五〇回は雁部氏の話を予定している。小集会の通知は会報に出すだけで特別の場合のほか葉書は出さない。

⑧海外連絡の件 （丹部）

秋にはいよいよシェラ・クラブ員百四十九人がくることになった。地方支部へ連絡して協力を依頼したい。

⑨婦人懇談会の件 （小倉）

二月一日、二日戸隠でスキー懇親会をやり十名参加者があって盛大だった。三月一日から三日まで八方でスキー大会をやる。

⑩松方氏出発の件 （大塚）

松方氏のカトマンズ行きの費用は約六十万円で一応会で負担する。航空旅費二十四万三千円、五百ドルの外貨わく十八万円その他である。

⑪山形県へ講師派遣の件 （大塚）

山形県教育委員会から二月八、九両日講師派遣を依頼されたので大塚、植村、伊藤の三人が出席する。

⑫会費値上げの件 （大塚）

一月二十二日の常務理事会原案どおり、値上げは止むを得ないだろうということになり、四月十九日（土）の通常会員総会にはかることになった。

ルーム日誌（44・1）

9日（木）定例理事評議員会
16日（木）山日記編集委員会
21日（火）日大桜門山岳会グリーンランド報告会
22日（水）常務理事会　図書委員会
23日（木）山本佗介氏出版祝賀会
29日（水）第二四八回小集会　西丸震哉氏「人喰い人種の話」

一月中来室者　二〇九名
山本氏祝賀会　八〇名

ルーム基金入金報告

事務局

十一月一日～一月三十一日間のルーム基金応募者は左記の通りです。

申込件数　四件
申込口数　四六九・四口
総申込件数　一、三八〇件
総申込口数　七、九七五口
（募金目標額に対し九九・六%）

氏名	会員番号	応募口数	現住地
広瀬　政美	六五五一	五	兵庫
平井　隆之	五四九〇	三	佐賀

本会関係その他
図書交換会　二・七口
中村清太郎遺作展剰余金四五八・七口

訂正　山二八三号三ページ四段目白瀬轟とあるのは轟（のとゞろき）、五段目一行目左下がりとあるのは右下がりの誤りにつき訂正いたします。
また山二八二号九ページ田辺氏寄贈図書のうち山岳第43～54とあるのは取り消します。

稲豊さん逝く

藤島　玄

稲田豊八氏（会員番号二三八〇番）が二月七日夕方、栃尾病院で胃筋腫のため逝去された。七十二歳であった。昨年は腹内から直径二㎝もある肉腫を摘出する大手術で殆んど一年を棒にふり、十二月十六日の手紙には「九死に一生を得てようやく人間世界に立ち帰ることが出来たのは、ひとえに山のおかげで、心臓が若々しかったためでした。春になったらまた毎日植物園通いが楽しみであります」とあり、雪消えを待ちかねていた稲豊さんであった。「私から守門山を取ったら何も残らない」が口癖であったとおり、青年時代から自然の宝庫守門山の開発、紹介に生涯をかけ、その魅力を引き出すことに情熱を注いできた稲豊さんと新潟日報が報道したごとく、守門を歩き、花を愛した。

逝去を機に、遅れに遅れていた稲豊さんの顕彰碑建設運動が起きている。これについては、会員の地元佐藤金一氏、長岡市の室賀輝男氏から近く趣意書の発表があると思う。

九日の葬式に参列した。桜花に囲まれた写真の下に桜樹院豊岳慈道居士の位牌がかざられ、左の欄間に「登高行」槙の額、右に「とこしえにさかゆくきみがまごころはすもりの山の四季のよそおい」遠山夕雲の追悼歌がかかげられてあった。まだ残雪の多い道路の両側に炎々と燃える供いの大蝋燭の列と、合掌の人達の列の中を、稲豊さんは静かに出て行った。
（四四・二・一〇）

訃報

森下健次氏（会員番号六二八三、昭和四十二年五月入会、紹介者高橋照、松田雄一）昭和四十三年十二月十八日作業中事故死された。
（遺族）岡山県笠岡市笠岡五〇三六ノ二、森下圭子氏
本会は謹んで哀悼の意を表する。

× ×

昭和四十三年度
「山」編集委員

編集代表　山崎安治
委員　吉沢一郎
〃　坂本矩祥
〃　松田雄一
〃　倉知敬
担当理事　小方全弘

昭和四十四年三月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
頒価五十円　（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代　（201号～250号）金600円也
送料　別受け　金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道2～15，電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7，電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15，電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀